

【熊本県賞】

文学が語る熊本の水

熊本県 熊本県立玉名高等学校附属中学校 二年 石渕 礼彰

ふるさとの水を飲み飲み水を浴び

これは俳人種田山頭火の句です。彼は自由律俳句で世間に名をとどろかせました。彼は水を愛した俳人としても知られています。その理由のひとつは、放浪していたため、水しか飲めなかった日も続きました。それは、

貧しさは水を飲んだり花を眺めたり

という句からも分かります。彼は水についての句を多く残しており、書き出しの句もその一つです。種田山頭火の故郷は山口県の防府。種田山頭火と水について調べているとアクアスフィアという所で、研究が行われていたことを発見しました。種田山頭火の句や日記の記述から実際に口にしたとされる水の pH や硬度を分析して、ふるさと防府と比べるというものです。分析の結果、ミネラル分の少ない軟水がほとんどで、防府の水とよく似ていることが分かったそうです。やっばり人は昔から慣れ親しんだ味が安心するし、おいしいと感じるんだなと改めて感じました。

私の故郷は熊本で、熊本の水はとてもおいしいです。その熊本の水を夏目漱石も俳句に詠んでいます。

湧くからに 流るるからに 春の水

これは、阿蘇の伏流水である清水が湧き出ている様子です。ついつい俳句にしたくなる、それだけ熊本の水が美しいことを表しています。

種田山頭火はそういう美しい水を愛したんだと思います。種田山頭火は音でその水が硬水なのか、軟水なのか聞き分けることができたといえます。俳句の中にも「水音」という言葉がよく出てきます。水の音でその上、硬水か軟水か聞き分けるなんて、現在の日本では、電車や車の音などで自然の水の音すら、静かに聞ける機会がほとんどあり

ません。種田山頭火が水音を聞いて、手ですくっておいしそうに飲んでるのが、目にかかびます。

春が来た水音の行けるところまで私も耳をすませたいです。

立ち止まると水音のする方へ道

とアンテナをはって生きる種田山頭火は素敵だと思います。

熊本の水を守っていくことは、とても大切なことだと思いますが、世界には安心安全な水を飲むことができない地域も、少なからずあります。そんな中で水の味について語れることはとても幸せなことだと思います。機械や薬などを使って海や水をきれいにする技術は発展し、普及しています。また、名水百選など全国の名水と言われる美しい水は都道府県などで守ろうとする取り組みが行われています。しかし、それでも昔に比べれば、水を守る豊かな自然は減りました。それを科学的な力で解決することは大切なことだと思います。でも上面だけで水を守ろう、大切にしようと言っても長続きしなかったり、水へ感謝することができません。そこで、まず水の美しさを文学を通して伝えて再確認することが必要だと思います。今、見られない景色だからこそ、文学で伝えて、語っていかねければならないと思いました。まずは、私も熊本の水に関わる文学をもっと知り、身近な人に伝えていきたいです。